

14. アミメカゲロウ目

現地調査では、片山栄助・松村雄・佐藤光一・多和田潤治・渡邊忠雄の各氏から御協力をいただいた。また、栃木県農業試験場の春山直人、栃木県立博物館の中村剛之の両氏には同定の労を賜った。心より感謝申し上げます。

(1) アミメカゲロウ目の生息状況

栃木県内からは、香川（2003）及び櫻井（2003）により14科64種のアミメカゲロウ類が記録されている。

本調査では、文献記録を含め6科10種が確認された。このうち、文献記録のみの種が1科1種である（表Ⅶ-14-(1)-1）。この結果、西那須野・塩原地区からは栃木県産アミメカゲロウ類のうち、約16%の生息が記録されたことになる。

かなり低い数値であり、極めて不十分な結果となった。近隣地区の状況を勘案すると、ヒメカゲロウ・クサカゲロウ・ウスバカゲロウ科を中心として追加記録される可能性が高い種類が相当数ある。今後の綿密な調査が望まれる。

【表Ⅶ-14-(1)-1 アミメカゲロウ目の科別種数一覧】

科名※	本調査地の生息種	調査確認	(文献記録のみ)
ヘビトンボ科	1	1	
ヒロバカゲロウ科	4	4	
ヒメカゲロウ科	1	1	
カマキリモドキ科	1	1	
ウスバカゲロウ科	1	1	
ツノトンボ科	2	1	(1)
計 6科	10種	9種	(1)種

※科の分類と配列は香川（2003）に準じた。

確認種の特徴を、科別に概観する。

アミメカゲロウ目の幼虫は、陸生ないし水生である。ヘビトンボ科のヘビトンボは、西那須野地区の平野部で、成虫が複数確認されている。確認状況から夜間に灯火へ飛来した個体と判断される。幼虫は水生で、「孫太郎虫」として薬用に、「ざざむし」として食用に供され古くから著名である。蛇尾川や箒川などの水系に沿って、広く分布するものと考えられる。

ヒロバカゲロウ科は、成虫の翅に横脈が多く、網目状を呈している。調査地内からは、ウンモンヒロバカゲロウ・スカシヒロバカゲロウ・キマダラヒロバカゲロウ・カスリヒロバカゲロウの成虫が、低山地を中心に確認されている。幼虫は水生とされる。

ヒメカゲロウ科では、マルバネヒメカゲロウの成虫が関谷から確認された。陸生のグループで、幼虫・成虫ともにアブラムシ類の天敵とされる。

カマキリモドキ科のカマキリモドキは、カマキリ類に似たやや小型の陸生の種類で、幼虫・成虫とも食肉性である。調査地内では低山地を中心に林縁部の葉上などで確認されている。夜間に灯火へ飛来した個体の観察例もある。

ウスバカゲロウ科のウスバカゲロウは、幼虫が社寺仏閣や祠、古い民家の軒下などの乾いた砂地に巣を造り、アリ類などの歩行性昆虫を捕食する。巣は噴火口とすり鉢を合わせ持ったような形態で、「蟻地獄」として知られている。調査地内では、成虫を確認できる機会は多くないが、幼虫の巣は各地で散見される。

ツノトンボ科はウスバカゲロウ科に近縁であるが、顕著な触角により一見して区別できる。オオツノトンボは平地から山地まで分布は広いが、個体数は一般に少ない。調査地内では山地から記録

されている。キバネツノトンボは、調査地内の主に平地から低山地の草地に分布している。井口では造成後に放置された荒地で突然多発（2006年5月11日、多数目撃、多和田潤治・渡辺剛）し始め、現在でも発生を継続している。ススキなど草本類の生育量が増加すれば、荒廃生態系にも順応できるのであろう。

（2）保全すべき種

アミメカゲロウ目については調査が行き届かなかったため、生息種、生息状況とも十分なデータが得られなかったが、ここでは1種を選定した。しかし、今後は「保全すべき種」に相当する種が確認される可能性も高く、この点には十分留意していただきたい。なお、国内分布や生態などの解説の一部は平嶋・森本監修（2008）に拠った。

また、「環境省レッドリスト（2007）」及び「レッドデータブックとちぎ（2005）」で選定されている種類は、種名のあとにカテゴリーを示した。

①キバネツノトンボ（ツノトンボ科） 環境省：－、栃木県：要注目

本州、九州に分布するが、生息地は限られる。幼虫は草の根際や石の下に潜み、他の昆虫類を捕らえて体液を吸うとされる。成虫は、春5月上旬から出現して6月中旬まで見られ、前翅の基部と後翅全体が黄色と茶褐色の斑紋を呈する。草上を活発に飛び回るが、ススキなど高茎の草本類の茎や葉上にもよく静止する。

調査地内では、平地から低山地の草地に広く分布する。しかし、産地はかなり局限される傾向が強い。生息地の多くは、農地周辺や造成後放置された荒地などに生じた、不安定な草地環境である。自然遷移や各種開発で衰退してしまう可能性が高く、楽観視することはできない。

（3）注目すべき種

注目すべき種に該当する確認種はなかった。

（文責：渡辺 剛）

【目録】

※科の分類、科・種の配列、和名・学名に関しては、香川（2003）に準じた。

※生息確認種と生息エリアは、今回の現地調査結果及び那須野が原博物館所蔵の標本に基づいた。

※筆者らが未確認の種は、文献記録から引用した。

科名	和名	学名	A 地域	B 地域	C 地域	山岳 地域
アミメカゲロウ目						
ヘビトンボ科	ヘビトンボ	<i>Protohermes grandis</i> (Thunberg)		○		○
ヒロバカゲロウ科	ウンモンヒロバカゲロウ	<i>Osmylus tesselatus</i> MacLachlan				○
	スカシヒロバカゲロウ	<i>Plethosmylus hyalinatus</i> (MacLachlan)			○	○
	キマダラヒロバカゲロウ	<i>Spilosmylus flavicornis</i> MacLachlan			○	
	カスリヒロバカゲロウ	<i>Spilosmylus nipponensis</i> (Okamoto)				○
ヒメカゲロウ科	マルバネヒメカゲロウ	<i>Neuronema albstigma</i> (Matsumura)			○	
カマキリモドキ科	キカマキリモドキ	<i>Eumantispa harmandi</i> (Navas)			○	○
ウスバカゲロウ科	ウスバカゲロウ	<i>Hagenomyia micans</i> (MacLachlan)		○	○	○
ツノトンボ科	オオツノトンボ	<i>Protidricerus japonicus</i> (MacLachlan)				□*1
	キバネツノトンボ	<i>Ascalaphus ramburi</i> MacLachlan		○	○	

【参考文献・引用文献】

※目録に引用した文献は、末尾に*を付している。

林文雄, 1997. ヘビトンボ・センブリ類. 日本動物大百科 第9巻 昆虫Ⅱ. 平凡社, pp. 12.

平嶋義宏・森本桂監修, 2008. 新訂 原色昆虫大圖鑑 第Ⅲ巻 (トンボ目・カワゲラ目・バッタ目・カメムシ目・ハエ目・ハチ目 他). 北隆館, 654pp.

平田慎一郎, 1997. カマキリモドキ類. 日本動物大百科 第9巻 昆虫Ⅱ. 平凡社, pp. 13.

香川清彦, 2003. 脈翅目 Neuroptera. 栃木県自然環境基礎調査 とちぎの昆虫Ⅰ. 栃木県林務部自然環境課, pp. 240-246. *1

環境省, 2007. 昆虫類レッドリスト. 絶滅危惧種情報, 環境省ホームページ.

松良俊明, 1997. ウスバカゲロウ類. 日本動物大百科 第9巻 昆虫Ⅱ. 平凡社, pp. 14.

櫻井正美, 2003. 脈翅目 Neuroptera (幼虫). 栃木県自然環境基礎調査 とちぎの昆虫Ⅰ. 栃木県林務部自然環境課, pp. 247.

園部力雄, 1998. 11 ガロアムシ目・バッタ目・ハサミムシ目・カマキリ目・アミメカゲロウ目・シリアゲムシ目・ハチ目アリ科. 黒磯市動植物実態調査研究会(編). 黒磯市動植物実態調査報告書. 黒磯市動植物実態調査研究会, pp. 404-412.

栃木県林務部自然環境課・栃木県立博物館編, 2005. レッドデータブックとちぎ. 栃木県, 898pp.

塚口茂彦, 1997. 脈翅類. 日本動物大百科 第9巻 昆虫Ⅱ. 平凡社, pp. 10-11.